

どくしょ あき 読書の秋

読書の秋と言われますが、最近火曜日が休みで、読書の時間がなかなか取れていません。ぜひ、ご家庭で本に親しむ時間を取っていただけたらありがたいです。生徒たちが今年読んだ本を読書ノートからいくつか紹介します。本を選ぶ時の参考にしてみてください。



「余生半年、君と一生分の恋をした。」(著 みなと)
内容 幼い時に白血病を患い、無理に笑う癖がついていたひまりが、通学バスで出会った晴臣と恋に落ちる話。
感想 病気とかがあっても素直に受け止め、彼氏と一緒に幸せになるのが良かったです。(2年)



「Iの悲劇」(米澤穂信)
内容 過疎化が進み、無人となった集落に人を呼び戻す「I ターンプロジェクト」を舞台に、移住者たちの間で起こる様々なトラブルを描いています。
感想 少し後味が悪いが面白かったです。主人公の救いがあまりないのが、かわいそうだと思います。(1年)



「記憶屋II」(著 織守きょうや)
内容 「記憶屋」という都市伝説を消してしまいたい。どうしても忘れられない記憶を消してくれる。
感想 本当に「記憶屋」が実在したら、少し興味があるけど、全て消されるので、嫌だなと思います。この物語はとても切なく終わる話で、とても泣けてきました。(2年)



「ごんぎつね」(作 新美南吉 絵 黒井 健)
内容 兵十は一番太いウナギをつかみに行きました。死んだのは兵十のお母でした。気づいたごんぎつねは、くりを毎日渡すようになりました。
感想 ごんぎつねはいたずらばかりして兵十のお母が死んだ。ごんぎつねは反省をしてくりを持っていくようになった。兵十はごんぎつねを見つけて銃を撃った。ごんぎつねは銃を撃たれてはたりと倒れました。なんか悲しい。(2年)

次に国語で出された夏の宿題の読書感想文から



ボクの消えた世界 2年

私が一番初めにこの本と出会ったのは、中一の時でした。国語科の先生に薦められて読んだのが始まりで、読み進めていくうちに、これは猫目線の猫が主人公の話なんだと興味がわいてきて一気に読んでしまったのを覚えています。そして今回、国語の先生に薦められて二回目でしたが、読みました。一回目に読んだ時よりも、さらに内容を深く知れた気がします。

この物語は、一人の青年がある日突然、余命宣告されたことから始まります。飼猫であるボクの名前はキャベツ。余命わずかなご主人様と、これから登場する悪魔との取引を間近で見ている僕が綴った話です。

私がキャベツなら、まず、大好きなご主人様が死んでしまうのは、耐えきれません。

私は、家族に置き換えて考えてみました。もし、大切な家族が一人でも欠けてしまったら、私は悲しくて悲しくて絶望するでしょう。その先の未来が不安で仕方ありません。残された他の家族の悲しむ顔も見たくありません。だったら、迷わず私自身が消えることを望むと思います。

ボクのご主人様は、余命宣告を受けると、その後から自分とそっくりな悪魔が取引に現れ、一つ何か大切なものを消す代わりに、一日寿命を延ばしてもらい契約をします。一週間という短い期間でご主人様は、次々に身近なものを消していきます。電話や映画、時計など。ところが、それと同時にご主人様と関わりのあった大切な人たちの記憶までもが消えていくのでした。

今度は、ご主人さまの立場になって、私だったら何を消されたくないかを考えてみました。自分は、余命宣告を受けた人間なので、この先の人生が短いことはわかっています。ならば、絶対に消えてほしくないものは、本です。死ぬことがわかってしまうということは、怖くて仕方ないことだけれど、きっと一日一日を大切にしたいだろうと思います。本は、気持ちを温かくしてくれたり、勇気づけてくれる私の相棒のような存在です。一年生の時は、それなりに友達はいましたが、休み時間や放課後に仲の良い友達が、他の子と私の知らない内容の話で盛り上がっているのを見た時、少し寂しさを感じることはありませんでした。私は内気な性格なので、なかなか自分から声をかけることができません。声をかけたいけれど、何を話して良いのかわからず、そういう時はいつも大好きな本を読んで、本の世界に入り込んでいくのです。きっと余命わずかな私の心に寄り添ってくれると思います。大好きな推しのキャラクターにも出会えるし、本は私のお薦めです、この本を読んで、私は命の尊さを考えさせられました。人は、大切なものを失って初めて大切だったことに気づきます。私は、私の周りにはいる大好きな人たちを大切に、後悔しない日々を送りたいです。（「世界からボクが消えたなら」著 涌井 学 原作 川村元気）